

他者との相互作用を考慮した幼児の造形表現プロセスの検討 —4歳児の製作におけるモノを他者に「見せる」行為の機能に着目して—

東京大学大学院教育学研究科 佐川 早季子

An Analysis of How Children Design and Make Objects Through Interaction With Others : Focus on 4-year-olds' Acts of Showing Objects

Graduate School of Education, the University of Tokyo, SAGAWA, Sakiko

要約

本論文の目的は、製作において、幼児がモノを他者に「見せる」行為が、「見せる」側の幼児にとってどのような機能をもつのか、「見せられた」側の幼児の製作過程にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。幼稚園4歳児2クラスを対象に1年間の縦断的観察を行い、「見せる」行為の相手と機能に着目して分析した。その結果、製作に固有の「見せる」行為の機能には、「製作結果の報告」を行う機能と「製作過程での交渉」を行う機能の2つがあり、幼児がモノを「見せる」相手は、学年開始期は保育者、学年最終期では他児が多いことが示された。また、幼児間での「見せる」行為の機能は、学年開始期には、「製作過程での交渉」をすることは少ないが、学年最終期では多くなっていた。最後に、事例分析より、幼児間に親密な関係が形成されたと考えられる学年最終期には、「見せる」行為による表現の触発が見られた。

【キー・ワード】「見せる」行為、製作、協働、相互作用、共同注意

Abstract

This study examined how four-year-old children show objects to other children and how these acts inspire creativity in the design-and-make process. Participatory observation was conducted in two kindergarten classes of four-year-olds for one year. The analysis indicated that 1) acts of showing objects in the design-and-make process functioned to report the results of design-and-make and to negotiate with peers, 2) these two functions varied according to the relationships between the children, 3) the children tended to show objects to teachers at the beginning of the year but to peers toward the end of the year, and 4) near the end of the observation, one child aimed to make new products that were different from a peer's, through "appropriation" of the ideas.

【Key words】 design-and-make activity, collaboration, interaction, showing objects, joint attention

問題と目的

本論文は、幼児が製作する過程において、幼児がモノを他者に「見せる」行為が、「見せる」側の幼児にとってどのような機能をもつのか、および、「見せられた」側の幼児の製作過程にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

「見せる」ことは、他者に、あるモノへの注意を向けさせ、注視することを促す行為である。美術・造形表現においては、モデルや自他の作品といったモノを注視することによって、表現者が様々な視覚的情報を得て思考する「視覚的思考」が中心となっているとされている (Arnheim, 1969)。そのため、美術教育を受けた生徒・児童の観察スキルの発達は実証的に示されている (Dolev, Friedlaender&Braverman, 2001; Tishman, MacGillivray&Palmer, 1999; Winner, Goldstein, &Vincent-Lancrin, 2013)。また、注視は、乳児が他者と同じモノを見ることで、他者の意図や感情といった心的状態を推察していることを示す共同注意の研究においても、分析されてきた (Tomasello, 1999)。このことから、モノを「見せる」行為は、他者の注視を請求する行為であり、そのモノを注視させることで、そのモノを媒介に自分の意図や心的状態の認知を他者に促す行為であると考えられる。

この「見せる」行為は、集団的な教育の場である幼稚園や保育園で頻繁に見られる行為 (鯨岡, 1999) であり、幼児が造形表現を行う場面でも、幼児はモノを見せ、自分の内的なイメージや製作意図を他者に伝えることによって、相手が着想を得て、表現を生みだすことが報告されている (岩立, 2007)。幼児の「見せる」という注視請求行為は、「見せる」側の幼児にとっては、自分のイメージや心的状態を他者に伝える行為であり、「見せられた」側の幼児にとっては、相手のモノを注視することで、アイデアやイメージの着想を得る機会を得る相互作用であると捉えられる。

しかし、幼児の造形表現は、従来、幼児個人の内的表出として捉えられることが多く (花篤, 1999)、「見せる」行為を含め、幼児が表現する過程における他者との相互作用については明らかになっていない。近年、21世紀型スキルとして他者と創造的に働く技能の育成や (Griffin, Care, McGaw, 2012)、幼児の表現に対する他者の影響を考慮することが求められている (文部科学省, 2008)。このことから、幼児が表現する過程における他者との相互作用について明らかにし、その知見に基づき、幼児の表現や創造性の発達を支援することが必要である。

製作における相互作用

造形表現の中でも、子ども (幼児・児童) が、様々な素材を使って、モノをデザインし形作る製作は、道具や素材、製作物が媒介となるため、子ども間の相互作用を支援する環境をもたらすと言われている (Hennessy&Murphy, 1999; Rowell, 2002)。製作の発達過程に関する研究では、区分の仕方や名称は異なるが、「探索的にモノをもてあそぶ段階」、「製作物を別のモノに見立てて意味づけをする段階」、「製作物で遊ぶために目的をもって作る段階」という共通の発達段階が示されており (e.g. 長坂, 1977; 花篤・山田・岡, 1990; 吉田, 1991; 槇, 2008)、明確な年齢区分を設けていない槇 (2008)

以外は、4歳から5歳にかけての年齢で、「作ったモノを見たてて意味づけをする段階」から「作ったモノで遊ぶために目的をもって作る段階」が見られるようになるとしている。すなわち、4-5歳の年齢で、製作物に付与したイメージを幼児間で共有したり、遊ぶことを目的に他児と協働で作り出すことが予想される。以上より、本論文では、4歳児を対象とする。

製作における幼児の「見せる」行為

製作中に幼児が「見せる」行為については、Roden(1997;1999)の研究がある。Roden(1997;1999)は、子どもが協働製作を発展させる代表的な方略として、モノを「見せること」と「評価すること」を挙げ、年齢別の特徴を指摘している。主に就学前段階と小学1年生のグループでは、「見せる」方略が頻繁に使われていたが、「評価する」方略に関しては、これらの学年では個人的な好き嫌いを言及するにとどまり、製作物とそのモノとしての基準を満たすかどうかについての批判的言及はなかったことを指摘している。対して、2年生では、「見せる」行為の回数は少なくなる一方、仲間からの批判的な評価や自己評価が多くなり、製作物の修正につながるが多かったことを明らかにしている。以上のように、幼児の「見せる」行為には年齢により異なる特徴があることが示されているが、製作において、幼児のモノを「見せる」行為が、「見せる」側の幼児にとってどのような機能を持つのか、および、「見せられた」側の幼児の製作過程にどのような影響を与えているのかは明らかになっておらず、時期により異なる特徴についても明らかになっていない。

そこで、本論文では、幼稚園4歳児2クラスを対象とした1年間の縦断的観察研究を行い、以下2つの分析によって検討していく。分析1では、「見せる」側の幼児に着目し、「見せる」相手と機能に関して、時期により異なる特徴を検討する。分析2では、「見せられた」側の幼児に着目し、製作過程への影響について、事例記述により質的に考察する。

方法

1. 観察

(1) 研究協力者

研究協力者は神奈川県内私立幼稚園の4歳児2クラス計56名(女児27名・男児29名、観察開始時平均年齢4歳5か月、年齢範囲4歳0か月～5歳0か月)である。なお、本論文に出てくる名前は、すべて仮名である。

(2) 観察の方法

観察は、20XX年度4～3月に週1回参与観察を行った(計34日)。自由遊びの時間に幼児が自発的に製作を始め、他児と言葉を交わしながら製作する場面を、ワイヤレスマイク(SONY/ECM-AW3)をつけたビデオで撮影し、同時に幼児の声が聞き取れるだけの距離を置き、幼児の会話や表情、動作、その場の雰囲気なども含めてメモした。観察終了後は、ビデオ記録とメモからフィールドノートを作成した。

2. 分析

製作において、幼児が他者にモノを「見せる」行為の相手と機能を検討するため、フィールドノートより、幼児が他者にモノを差し出し「見せる」行為を抽出して1回とカウントした。研究協力者である4歳児2クラス56名のうち、1年間の観察期間中に「見せる」行為が観察された幼児は30名であった。この30名の行った計222回の「見せる」行為を、以下の点に着目して分類した。さらに、時期により異なる「見せる」行為の機能の特徴を検討するため、1年をⅠ期(4月～7月)、Ⅱ期(9月～12月)、Ⅲ期(1月～3月)に分け、各時期でのカテゴリー別回数を算出した。

(1) 「見せる」行為の相手による分類

モノを「見せる」行為の受け手が保育者(観察者および保育参観中の保護者も含む)か他児かにより分類した。

(2) 「見せる」行為カテゴリーの作成

続いて、以下の手順に従って、「見せる」行為カテゴリーを作成した。第1に、「見せる」行為の実態に基づく分類を行うために、ビデオ記録とフィールドノートを照合し、各「見せる」行為によって相手に伝えられた内容、行為のなされた状況、前後の文脈を判定し、「見せる」行為のカテゴリーを命名した。その際、モノを「見せる」行為によって、製作した結果を「伝達」するのか、製作している過程で相手と意見調整をして合議に至るよう「交渉」するのかといった性質の差異があることが確認された。そこで、第2に、<製作結果の報告>と<製作過程での交渉>の2つのカテゴリーに大別した。さらに、<製作過程での交渉>については、自分と他者の製作意図のどちらを優先しているかによって性質の差異が認められた。そのため、第3に、「自分の製作意図の主張」と「相手の製作意図への同調」の2つに分類し、下位カテゴリーをまとめた。上述した手続きによって得られた「見せる」行為のカテゴリーが表1である。なお、本研究の文中での< >は「見せる」行為カテゴリー、<< >>は「見せる」行為の下位カテゴリーであることを示す。

表1 「見せる」行為カテゴリーの定義および具体例

「見せる」行為カテゴリー		定義	具体例
製作結果の報告	よくできたことの伝達	できたこと(完成/幼児の技能)や、製作物のできばえ、相手の製作物よりすぐれていることを相手に伝える。	「見て、すごいでしょ」と言って、製作物を差し出す。
	予想外になったことの伝達	自分の予想とは異なるものになったこと、予想とは異なるものを見つけたことを相手に伝える。	「見て、ひし形になったよ」と驚いた表情で言い、製作物を差し出す。
	相手と同じモノをつくったことの伝達	相手と同じモノをつくったことを伝える。	相手と同じモノをつくった後、「○○ちゃんも。同じだね」と言って、製作物を差し出す。
製作過程での交渉	自分の製作意図の主張	提案・教示・指定	素材・方法・製作物を提示することで自分の製作意図を伝える。
	相手の製作意図への同調	確認	素材・方法・製作物を提示することで、相手の意図をうかがい、同じように製作しているかどうかを確かめる。
		相手と同じモノを用いた遊びへの参加表明	相手が提案・指定した製作物を提示し、遊びに参加する意図を伝える。

結 果

分析 1. モノを「見せる」行為の相手と機能の時期的特徴

一緒に過ごす時間の長さや回数の多さといった時間的経過に伴い、幼児間の関係における親密性は変化し、それに伴って幼児間の相互作用も変化すると考えられることから、幼児が他者にモノを「見せる」行為の相手および機能の時期により異なる特徴を検討する。

幼児がモノを「見せる」相手が保育者か他児かにより、時期ごとに分類したのが表 2 である。

表 2 各時期における「見せる」相手（保育者／他児）別回数（比率：％）

	I 期	II 期	III 期
保育者宛て	42(60.0)	27(43.5)	27(30.0)
他児宛て	28(40.0)	35(56.5)	63(70.0)
合計	70(100.0)	62(100.0)	90(100.0)

表 2 より、I 期は保育者に対してモノを「見せる」行為の比率が高いが（60.0%）、II 期、III 期になるに従って、43.5%、30.0%と低くなる。それと同時に、他児宛ての「見せる」行為の比率は 40.0%から 56.5%、70.0%と高くなる。これより、学年開始期の I 期では、保育者にモノを「見せる」頻度が高いのに対し、クラス内の幼児が既知となり、一緒に過ごす時間が長くなり、一緒に遊ぶ回数が多くなるに伴い、学年最終期の III 期には、保育者より他児に向けてモノを「見せる」比率が高くなると言える。1 年間という時間の経過に従い、幼児間の関係が変化し、それに伴って相互作用の質も変化するということが示唆される。そこで、次に、幼児が他児に向けてモノを「見せる」行為に焦点を絞り、「見せる」行為の機能の時期的特徴を検討する。

幼児が他児に向けてモノを「見せる」行為の計 126 回を「見せる」行為カテゴリーに則って分類した際の時期別回数を示したものが表 3 である。

表3 他児に向けてモノを「見せる」行為の各時期におけるカテゴリ別回数（比率：%）

「見せる」行為カテゴリ		I期		II期		III期		
製作結果の報告	よくできたことの伝達	22(78.6)	9(32.1)	16(45.7)	15(42.9)	23(36.5)	19(30.2)	
	予想外になったことの伝達		10(35.7)		1(2.9)		4(6.3)	
	相手と同じモノをつくったことの伝達		3(10.7)		0(0.0)		0(0.0)	
製作過程での交渉	主張	提案・教示・指定	5(17.9)	5(17.9)	10(28.6)	10(28.6)	22(34.9)	22(34.9)
	同調	確認	1(3.6)	1(3.6)	9(25.7)	9(25.7)	18(28.6)	7(11.1)
		相手と同じモノを用いた遊びへの参加表明		0(0.0)		0(0.0)		11(17.5)
合計			28(100.0)		35(100.0)		63(100.0)	

表3より、＜製作結果の報告＞は、I期では78.6%、II期では45.7%、III期では36.5%と比率が低くなっているのに対し、＜製作過程での交渉＞は、＜主張＞＜同調＞ともに比率が高くなっている。これより、学年開始期のI期では、幼児が製作結果について他児に報告する機能を持つ「見せる」行為の比率が高いのに対し、II期、III期では、何をどのようにつくるかという製作過程で交渉する機能を持つ「見せる」行為の比率が高くなると言える。

分析2. 対象児の「見せる」行為および製作過程の時期別の特徴の分析

次に、「見せる」行為の機能の时期的相違および「見せる」行為により生じる製作過程について検討するため、対象児1名の事例(事例1~3)を取り上げ、文脈に即して考察する。対象児は、全3期で「見せる」行為が観察され、II期、III期では、特定の遊び相手であるまきに対して「見せる」行為を行うことの多かったななこを選定した。幼児間の親密性に応じて、変化が予想される「見せる」行為の機能を検討するためである。表4に、対象児ななこおよびまきと一緒に製作することの多かったまきを合わせた2名に関して、各時期での他児宛での「見せる」行為カテゴリ回数を示し、事例考察で参照する。

表4 対象児ななこおよびまきの他児宛での「見せる」行為カテゴリに関する時期別回数

「見せる」行為カテゴリ		ななこ(年間合計26回)			まき(年間合計19回)		
		I期	II期	III期	I期	II期	III期
製作結果の報告	よくできたことの伝達	0	0	9	/	6	1
	予想外になったことの伝達	0	0	0		0	1
	同じモノをつくったことの伝達	1	0	0		0	0
製作過程での交渉	提案・教示・指定	0	7	9		2	0
	確認	0	0	0		8	1
	同じモノを用いた遊びへの参加表明	0	0	0		0	0
期ごとの合計		1	7	18		16	3

1) 「見せる」行為を通して同じモノをつくったことを伝え、経験を共有する I 期

事例 1	「同じだね」	7 月 12 日
<p>製作テーブルに、ななこが来て、折り紙を折り始める。その隣に、みのりが来て、ななこと並んで立つ。ななこは半透明のシートを取り、シートを筒状にくるくると巻くと、真ん中をテープで止め、「リボン」をつくる。みのりは、ななこのつくり方を見ながら同じように「リボン」をつくる。ななこは「リボン」を次々とつくり、自分の服に貼っていく。<u>(a)みのりは、自分でつくった「リボン」を手首に貼り付け(), ななこににこにこしながら見せる。</u> <u>(b)すると、ななこは、服に貼った自分のリボン</u> <u>をみのりに見せ(), みのりと目を合わせ、うなずきながら「同じだね」と言う。</u>そして、ななこが保育者に向かって、大きな声で「みのりちゃんと、アイドルごっこする」と言うと、保育者は「そうなの。いつものやつね」と答え、ななこやみのりと一緒にいすで舞台をつくり、音楽をかける。ななことみのりは舞台に立ち、観客役の幼児たちの前で「みなさーん、こんにちは一」と元気にあいさつし、歌ったり踊ったりする。<u>(遊び)</u></p> <p>(a) <製作結果の報告> 《相手と同じモノをつくったことの伝達》、(b) <製作結果の報告> 《相手と同じモノをつくったことの伝達》</p> <p>注: 事例の中に、幼児がつくった製作物の図を示す。事例中の<u>囲み部分</u>は「見せる」行為、<u>波線部</u>は「見せる」行為を通して生じた製作、<u>下線部</u>は「見せる」行為を通して生じた遊びであることを示す。また、事例記述の後に、「見せる」行為カテゴリーの分類を示す。</p>		

事例 1 で、みのりは、ななこが「リボン」をつくっているのを見て模倣し、同じように「リボン」をつくっている。しかし、製作途中の段階では、モノを見せたり言葉でのやりとりは見られず、囲み部分(a)(b)のように、製作後に同じモノをつくったことをお互いに報告し、一体感を感じていると考えられる。I 期は、対象児ななこに限らず、そのときの興味に応じて遊ぶ相手が変わることが多かった。そのため、そのときにその場に居合わせた他児に製作物を「見せる」ことで、相手と経験を共有し、一体感を感じ合う姿が見られた。ななことみのりは、「リボン」を互いに身につけていることから、よく着飾ってやっているアイドルごっこをしようと思いついた様子で、保育者にアイドルごっこをすると告げている。ここでは、最初から幼児同士でアイドルごっこをするという目的は共有されていなかったものの、同じモノをつくり、同じモノを身につけていること、それを見せ合うことで相手との一体感が生まれ、即興的に「つくったモノを使用する遊び」へと展開したと考えられる。

2) 同じモノをつくるために、「見せる」行為を通して交渉するⅡ期

事例2	「こうするんだよ」「こう？」	12月6日
<p> ななことまきは、保育者が始めたペープサートの劇に見入っていたが、じきに、ななこだけその場を離れ、製作テーブルの方に行く。ななこは紫色のビニールシートを取ると、(c)「まきちゃん、これ、つくれない？こういう風にさ」と言って、ビニールシートを持ち上げる。しかし、まきが劇をみ続けていたため、(d)「まきちゃん、ちゃんと見て」と言って、まきの肩を後ろからつかみ、自分の方へと向ける。(e)ななこは「こうやってね、ぎゅっとしてね」と言いながら、紫色のビニールシートをくるくると巻いて両側から引っ張るところ(/)をまきに見せる。まきは、ななこの言うとおりにし(模倣)、(f)ななこの目の前に差し出して「こうですか？こう？こう？」ときく(/)。 (g)ななこは「そう。こういうふうにして、ペタッとやるの」と言い、黄色のビニールシートを紫色のビニールシートを巻いたものに合わせ、貼るしぐさを見せる(✕)。 (h)まきは「こう？これならいいかな、ななこちゃん」と言う(✕)が、ななこは、まきの製作物を見て(i)「大きいからだめだよ。これくらいの小さいのじゃないとだめだよ」と言って、手に持っているビニールシートを見せる(✕)。ななこが「これくらいじゃないと、お弁当終わった後、プリキュアごっこできないけど、いい？」と言うと、まきが「やだ」と言う。ななこは「じゃ、ちいちゃいのをつけるのがまんして」と言う、(j)まきは「じゃ、つけるね。こう？」(模倣)と言って(✕)、ななこの目の前に製作物を差し出す。ななこは「そう」と言う。そして、二人は製作物を持って、外に出ていく。 </p> <p> (c) <製作過程での交渉> : 《提案・教示・指定》, (d) <製作過程での交渉> : 《提案・教示・指定》 (e) <製作過程での交渉> : 《提案・教示・指定》, (f) <製作過程での交渉> : 《確認》, (g) <製作過程での交渉> : 《提案・教示・指定》, (h) <製作過程での交渉> : 《確認》, (i) <製作過程での交渉> : 《提案・教示・指定》 (j) <製作過程での交渉> : 《確認》 </p>		

Ⅱ期以降は、ななことまきが一緒に製作する場面が4場面観察され(Ⅱ期2場面、Ⅲ期2場面)、製作場面以外でも自由遊びの時間にはほぼ毎日一緒に遊ぶ関係であった。Ⅱ期およびⅢ期では、ななこの他児への「見せる」行為のほとんどがまきに向けられたものであったことから(Ⅱ期・Ⅲ期計25回中24回)、ななことまきは特定の遊び仲間であったことがわかる。Ⅱ期では、事例2に見られるように、「見せる」行為を通してななこは自分の意図を主張し(Ⅱ期計7回中7回)、一方のまきは相手の意図を確認し、相手の製作物の模倣をしながら製作を進めていた(Ⅱ期まき→ななこ9回中8回)。ななことまきの間で、一方が教え、他方が教わるという関係ができていたと言える。Ⅱ期では、ななことまきの間で、「見せる」行為を通して<製作結果の報告>をする事例は見られず、同じモノをつくるために<製作過程での交渉>をする事例がほとんどであった。Ⅱ期では、「見せられた」側が「見せた」側の幼児の製作を模倣するという形で、製作が行われており、同じようにつくりたいと遊びに入れてあげないという発話から、製作物の異同が遊びの仲間入りを認めるかどうかの判断に結びつくものであると考えられる。

3) 「見せる」行為を通して相手の製作物との相違を示すⅢ期

事例 3	「まきちゃんよりすごいをつくる」	3月13日
<p> ななことまきは、製作テーブルの前に立ち、折り紙を折っている。まきは、「次、何折ろうかな。そうだ、星折ろう。星は最初は三角だっけ。三角だと思ふな」と言いつつ折り始め(△)、「こうして、こうだ」とつぶやきながら折る。ななこがそれを見て、「ああ、そうじゃなくて」と言うと、(k)まきは「こうなの?」と言って、新しい折り紙を取り、<u>ななこと同じように折る(△)(模倣)</u>。ななこは「それで、折り目をつけたい」と言いつつ、三角に折った折り紙を開くが(◇) 、折り方がわからなくなってしまう。すると、まきが「切ってみようかな」と言いつつ、はさみをもつ。<u>ななこはそれを見て、「あ、そうだ」と言いつつ、はさみをもち、折った折り紙を切って「切れた」と言う(▽)(模倣)</u>。その後、まきは、「面白いのをつくっちゃおう」とウキウキした様子で言い、新しく折り紙で折り始める。まきは思いつきで折り続け、「こうやると、わ、すごい」と言う(△) 。ななこは、<u>まきの折り紙を見ながら、同じように自分の折り紙を折り(模倣)</u>、最後にまきとは違う折り方をして、<u>(1)折ったものをテーブルの上で滑らせるように動かし「まきちゃん」と言いつつ、見せる(◇)(ずらし)</u>。まきは「魚?」ときくが、すぐに自分の製作に戻り「折り目に沿って」とつぶやきながら折る。ななこが「何それ?」と聞くと、まきは楽しそうに「折ったら、こうなっちゃった」と言いつつ笑う。そして、折り紙でつくった製作物とビニールシートでつくったリボンを合わせ、<u>(m)ななこに向けて差し出しながら、「ねえ、ななちゃん、見て。ほら」と言いつつ見せる(♡)</u>。ななこはそれを表から裏から見ると、素材かごをあさり「じゃ、ななこは、まきちゃんよりすごいをつくるから」と言う。まきは、新しい折り紙を取り、「まきは三角に折って」と言いつつ折り始めると、<u>ななこはまきの手元を見て、思いついた様子で、「ああ、三角でネコつくろう」と(模倣)</u>と言いつつ、まきがななこの手元を見る。そして、<u>(n)ななこは製作物をまきに見せ、「ねえ、見て、ネコ」とにっこりして言う(◇)(ずらし)</u>。まきはそれを見て、すぐに自分の製作に戻る。 </p> <p> (k) <製作過程での交渉> : 《確認》, (1) <製作結果の報告> : 《よくできたことの伝達》, (m) <製作結果の報告> : 《よくできたことの伝達》, (n) <製作結果の報告> : 《よくできたことの伝達》 </p>		

ななことまきの関係性について、担任保育者は、「いつもまきがななことと同じモノをつくっていることが気になっていたが、月齢が低くあらゆることに自信のなさが感じられたまきにとっては、相手と一緒にモノをつくることで安心するという面があったようだ」と述べている。ただし、事例4の観察された日の3日前、ななことまきは初めてけんかをし、それ以来関係性が変わってきているのを感じるのことであった。事例3にも2人の関係性の変化が反映されており、ななこのつくるモノをまきが模倣することはあるものの、まきはまきで自分の好きなモノをつくっている。**囲み部分(m)**では、ななこに対して「見て」と言い、自分の製作物を見せて報告している。見せられたななこも、それを見て刺激を受け「まきちゃんよりすごいをつくる」と言いつつ、自分の製作に取り組んでいる。ここでは、いつもななことと同じモノをつくり、それで安心していたまきが、ななこはちがうものを自分でつくり、ななこに見せ、自己主張している姿が見られる。その中で、まきとななこは、「見せる」行為を通して意図を伝えたり、相手の意図を確認して模倣するだけでなく、同じ素材を用いながらも相手とは異なるモノをつくらうとする「ずらし」の製作を行うようになっている。お互いに自己主張できる関係性になったことで、相互に見せ合い、その「見せる」行為がきっかけとなり、見せられた幼児

が他児の表現に触れ、その表現から新たなアイデアを採り入れて自分の表現をするというように、見せ合うことで、両者に「模倣」と「ずらし」という表現の触発が生じていると言える。

以上、前後の文脈に即した対象児なこの事例分析より、ななこの3事例では、時期ごとに、「見せる」行為を通しての経験の共有、製作方法の交渉、製作物の差異の明示という相違が見られ、製作物の異同が重要な意味を持っていた。また、Ⅱ期以降では、特定の他児との製作が中心となっており、Ⅱ期は一方的な「教える—教えられる」という関係で、同じ製作をすることを目的に「見せ」合っていたが、Ⅲ期ではそれぞれが自分の製作物について報告し、相手との差異を明示する中で、相手のアイデアを採り入れ、新しい表現が創出されていた。

考 察

本論文では、製作において、幼児がモノを他者に「見せる」行為が、「見せる」側の幼児にとってどのような機能をもっているか、そして、「見せられた」側の幼児が、相手のアイデアを採り入れ、表現をどのように生成しているのかを検討した。その結果、以下2点が明らかになった。

第1は、製作場面に固有の「見せる」行為の機能として、大きく分けて<製作結果の報告>と<製作過程での交渉>という2つの機能があり、1年間の時間経過に伴い、同じクラスの特定の幼児と一緒に過ごす時間が長くなり、一緒に遊ぶ回数が多くなったことで、幼児間での関係における親密性が形成されたと考えられ、それに応じて「見せる」行為の相手と機能も時期により異なる特徴を示すことが明らかになった。「見せる」相手に関しては、学年開始期のⅠ期は保育者に向けられることが多かったのに対し、学年の最終期にあたるⅢ期では保育者より他児に向けられることが多い。「見せる」行為カテゴリーの時期別回数の分析結果からは、Ⅰ期では<製作結果の報告>を行うための「見せる」行為が多いが、Ⅲ期では少ないことが示された。これより、学年開始から時間が経っておらず、幼児間での関係における親密性が十分に築かれていないⅠ期の「見せる」行為には、自分の製作意図を主張したり、相手の製作意図に同調したりというような交渉の機能はあまり見られなかったと言える。Ⅱ期、Ⅲ期では、自分の製作意図を主張したり相手の製作意図に同調したりして、交渉しながら製作することが多くなることが明らかになった。

第2に、対象児1名の各時期での「見せる」行為とその後の「見せられた」側の製作過程について事例分析を行った結果、「見せる」行為と製作過程の時期的特徴には相違が認められた。Ⅰ期では相手と経験を共有するための「見せる」行為、Ⅱ期では同じ製作を行うための「見せる」行為が見られたが、Ⅲ期では、相手と同じように製作しつつも、模倣ではなく新しい表現を生成したことを示すための「見せる」行為であった。この事例での製作過程では、「見せる」行為の後、「見せられた」側の幼児が相手の製作物からアイデアを採り入れ、そこに自分の発想を付加して製作していた。これは、「他者に属する何かあるものを取り入れ、それを自分なりのものとする過程」と説明される「アプロプリエーション」（「専有」とも訳される）であると言える（Wertsch, 1998/2002）。相手の製作意図に同調するのみではなく、相手のアイデアや製作方法を採り入れた上で、自分の発想を付加し、表現を生成している。本論文の事例においては、幼児が他者との相互作用を通して表現する過程には、模

倣と「アプロプリエーション」という2つの表現過程が見られた。そして、「アプロプリエーション」による表現は、幼児間の関係に親密性が形成された時期に生起する表現であることが示唆された。

本論文は、以下2点を今後検討すべき課題とする。第1に、幼児間の関係における親密性の形成の根拠を、保育者の発言や観察期間中の一緒に製作している回数に求めている点に課題がある。二者間の親密性に関する先行研究では、親密性の有無について幼児間の交渉回数の多さや時間の長さのほか、幼児に好きな子や仲の良い子を尋ねるペアリングの指名法や、それと実際の対人行動を併せたソシオメトリック法などを用いて同定している。今後は、このような指標を用いて、観察とインタビューのみによらない多角的な視点から、幼児間の相互作用と親密性との関連を検討することを課題とする。第2に、時間的経過に伴う変化には、幼児間の関係における親密性の形成だけでなく、自己主張と自己抑制といった自己調整能力の発達や、時期による保育者の教育的意図の相違といった要因も考えられる。今後は、上記の要因の同定も進めていくことが課題である。

引用文献

- Arnheim, R.(1969). *Visual thinking*. Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Dolev, J.G., Friedlaender, L.K.&Braverman, I.M.(2001). Use of fine art to enhance visual diagnostic skills. *JAMA*, **286**/9, 1020-1021.
- Griffin, P., McGaw, B.&Care, E.(2012). *Assessment and teaching of 21st century skills*. Springer.
(三宅なほみ監訳。(2014). 21世紀型スキル・学びと評価の新たなかたち 北大路書房)
- Hennessy, S.&Murphy, P. (1999). The potential for collaborative problem solving in design and technology. *International Journal of Technology and Design Education*, **9**, 1-36.
- 岩立京子(2007). コミュニケーションとしての表現.無藤隆監修 事例で学ぶ保育内容領域表現 萌文書林, 116-120.
- 花篤實・山田直行・岡一夫(1990). 表現—絵画製作・造形—<理論編>, 三晃書房.
- 花篤實 (1999). 幼児造形教育の基礎知識 建帛社.
- 鯨岡峻 (1999). 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房.
- 槇英子(2008). 保育をひらく造形表現 萌文書林.
- 文部科学省(2008). 幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 長坂光彦(1977). 絵画製作・造形 川島書店.
- Roden, C. (1997). Young children's problem-solving in design and technology: Towards a taxonomy of strategies. *Journal of Design and Technology Education*, **2**, 14-19.
- Roden, C. (1999). How children's problem solving strategies develop at Key Stage 1. *Journal of Design and Technology Education*, **4**, 21-27.
- Rowell, P.M. (2002). Peer interactions in shared technological activity: A study in participation. *International Journal of Technology and Design Education*, **12**, 1-22.

Tishman, S.D., MacGillivray, D. &Palmer,P. (1999). *Investigating the educational impact and potential of the Museum of Modern Art's Visual Thinking Curriculum: Final report to the Museum of Modern Art*, New York: Museum of Modern Art.

Tomasello, M.(1999). *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

吉田泰男(1991). 美的教育原論—あそびの中に感性と知性の内化と外化を求める幼児造形教育論の確立 文化書房博文社.

Wertsch, J.V.(1998). *Mind as action*. Oxford University Press. (佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子 (2002). 行為としての心 北大路書房.)

Winner, E., Goldstein, T.R.&Vincent-Lancrin, S. (2013) *Art for Art's sake? :The impacts of arts education*. Paris:OECD Publications.

謝 辞

いつも温かく迎えてくださる幼稚園の子どもたち，先生方，保護者の皆様に感謝申し上げます。そして，ご指導頂きました東京大学大学院秋田喜代美教授，研究室の皆様に深く感謝申し上げます。